



巻頭言

日本癌病態治療研究会会長

磯野可一

癌治療は本研究会が目的として掲げたごとく、いまや根治を目指しての盲進の時代から、QOLを考え、そして患者個々の病態に合った治療が重んじられる方向に進んでおります。

そのために分子生物学的研究が宿主と癌腫との両立場から進められ、その発展はめざましく、新しい研究成果がつぎつぎに発表されております。これらが実際の臨床の場にもどのように直結し、どのように役立つかが今後の大きな課題であります。この両分野を兼ね備えた研究会とし本研究会は発足したわけでありまして、今後は、次第に臨床の場としての役割も広がっていくものと思われまします。

日本癌病態治療研究会は、1992年に発足して、はや4年の歳月を迎えるに至りました。その間、学会誌として英文誌 (Annals of Cancer Research and Therapy) が年2回発行され、原著論文としてすぐれた英文の掲載が行われていることは喜ばしい限りであります。

また、班研究もHLA、QOL、遺伝子班と三つのものが発足し、それぞれに有意義な成果が報告されております。既述のごとく、本研究会は年1回の研究会の開催と英文誌の発行、班研究を主な事業としておりますが、本研究会の会員相互の親睦をいま一層緊密なものとするべく、和文誌の発行が立案され、ここに第1号が発刊される運びとなりました。これも偏に編集員皆様方の熱意の賜と深く感謝申し上げます。

紙面を通じて情報の交換、教育の場として和文誌が登場することは、研究会の一層の発展のためにもきわめて大切なことだと思っております。

したがって、その内容とするところは総説、随筆、研究会の話題、教育的紙面、症例報告、研究速報、海外便り、ときには最近の話題での特集などを考えております。

和文誌を興味あるものとし、かつ会員の皆様方にその発刊が待ち望まれるものにするためには、原稿の蓄積が必要です。会員の皆様方も奮って本誌への投稿をお願い致します。